



◎本ニュースレターは、木曽三川流域におけるエコロジカル・ネットワーク形成に関連する地域の取り組み情報を発信するものです◎

寒さの厳しい季節ですが、木曽三川流域では野外活動を含め、さまざまな環境系イベントが開催されました。そのなかのほんのいくつかですが、事務局で参加してきました行事について、本号でご紹介します。Facebook ページでは、こうした情報をいち早く掲載していますので、ぜひチェックしてみてください。

(お知らせ)エコネット応援団の皆さまへ。

①関連資料を貸し出し・提供いたします

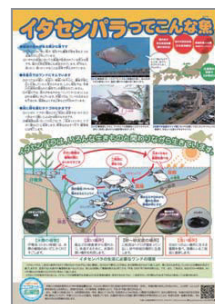
木曽三川流域エコネット応援団（以下、エコネット応援団）に参加の皆さまへ、事務局では関連資料等の貸出し・提供を行っています。資料の種類は次の4種類です。また、エコネット応援団ロゴマークのデータ提供も行っていますので、お気軽に事務局までお問い合わせください。（皆さんの資料にもマークをつけてアピールしてください！）こんな資料があったらいいのに、といったアイデアも大歓迎です。



①木曽三川流域生態系ネットワーク概要紹介資料（A3二つ折チラシ、またはA1版パネル4枚組）



②エコネット応援団概要紹介資料（A3二つ折チラシ）



③イタセンバラ紹介資料（A3チラシ、またはA1ポスター）



④ハリヨ紹介資料（A3チラシ、またはA1ポスター）

⑤木曽三川流域の環境関連イベントなどの情報提供のお願い

木曽三川流域の環境関連イベントの情報を、このニュースレターやエコネット応援団 Facebook ページで紹介しています。

開催案内(参加者募集)だけでなく、開催結果のご報告・ご紹介含め、皆さまからのさまざまな情報提供や寄稿をお待ちしています（お悩み相談なども、可能な限り検討していきます）。Facebook ページへのビジター投稿も大歓迎です。皆さまの力で盛り上げていただきたく、ご協力よろしくお願いいたします。



facebookページはこちらからアクセス!
<https://www.facebook.com/kisosanseneconet/>



ニュース情報を募集しています!

木曽三川流域生態系ネットワーク推進協議会では、木曽三川流域におけるエコロジカル・ネットワーク形成に関連する地域の取り組み情報をニュースレターにまとめて発信しており、生物多様性の保全や生きものを活用した地域づくりなど、流域のフレッシュな情報を募集しています。下記お問い合わせ先まで情報をあわせてください。（なお、紙面の都合等で取材・掲載できない場合もありますこと、予めご了承ください。）



木曽三川流域生態系ネットワーク推進協議会（事務局：国土交通省木曽川上流河川事務所）とは、川とともに育まれてきた流域の自然や文化を保全・活用し、地域の魅力を向上させるとともに、人と自然・人と人との絆を深めることを目的とし、流域の自治体・河川管理者・有識者によって、平成26年度に設立されました。

本協議会では、木曽三川流域において、自然環境を保全・再生・創出してつなげる「生態系ネットワーク形成」に関連する活動を行う（または賛同する）、地域のさまざまな団体等に参加していただく「木曽三川流域エコネット応援団」を結成しています。応援団の皆さんの活動に関する情報共有等を図ることにより、地域の交流・協働を促進し、取り組みのさらなる発展を目指しています。

「木曽三川流域生態系ネットワーク」ホームページ（<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisojoyo/econet/index.html>）



木曽三川流域生態系ネットワーク推進協議会事務局：国土交通省 木曽川上流河川事務所 河川環境課（岐阜県岐阜市忠節町 5-1）
【問い合わせ先（H30事務局窓口）】 cbr-kisojoyo@mlit.go.jp / tel 058-251-1321 / fax 058-251-4301

■2019年2月16日（土）〔愛知県一宮市 東加賀野井地区〕

「木曽川ワンド再生工事見学会」を開催

地域の皆さんに河川環境改善の現場を体験していただきました

エコネット応援団など地域の皆さんおよそ 50 名に参加いただき、イタセンバラなどのすみワンド環境改善にむけて実施している河川工事の見学会を開催しました（主催は国土交通省木曽川上流河川事務所）。

整備内容の説明では、樹木伐採やヘドロの浚渫だけでなく、ワンドを掘り下げたり、ワンドとワンド・ワンドと川をつなげたり、そのために生物を避難させたり、ヘドロを乾燥させて移動させたりと、工夫しながらいろんな作業をしていることがわかりました。工事スタッフの方から、重機にもそれぞれの役割があることを教えてもらい、試乗（子どもたちはとくに楽しそうでした）もさせていただきました。

伐採した樹木を輪切りにしてもらって、年輪を数える体験もできました。この日に確認したのは、センダングサが約 10 年、エノキが約 20 年、ヤナギ類が約 30 年と、ワンド環境の悪化の一因として、近年に樹林化が進んだというお話を目見て実感できる結果でした。

また、モニタリング調査体験として、現地で採捕されたおよそ 10 種類の魚の仕分け作業などを行いました。ゼゼラやウキゴリなどのワンドによくみられる魚類のほか、オイカワなどの本川にすむ魚なども確認できました。工事によって生息場のネットワーク化が進むと、もっといろんな魚がみられるようになるのではというお話しでした。外来種のタイリクバラタナゴやブルーギル、カダヤシ、ウシガエルもみられました。二枚貝を食べてしまうことでタナゴ類にも悪影響があるというヌートリアはこの日は現れませんでした。木曽川のワンド群ではよくみかけるとのことでした。

見学会の最後には、工事前に避難させていた二枚貝類を、整備済みのワンドへ再放流しました。将来、参加者の皆さんの手で放流した貝類が増えて、タナゴ類の繁殖に役立ったりしたらうれしいです。

寒い日でしたが、参加された方からは「工事の内容と意義を理解することができてよかった」、「観察が楽しかった。実際に体験できるイベントってよい」、「木曽川を環境をよくするために、自分たちができるゴミ拾い等を行っていきたい」、「車に乗れたのがよかった」など、うれしい感想が聞かれました。



伐採した樹木の年輪を数えることで、どのくらい前から樹林化していたのか感じることができました



施工後のワンドに二枚貝を再放流しました。増えてほしいですね



ふだんは重機が動いているのを何気なく見ていましたが、むづかしい工事を工夫しながら実施されていることがよくわかりました

■2018年11月27日(火)〔愛知県一宮市 起地区〕

イタセンバラ飼育に取り組む地元起小学校の皆さんが 木曽川の自然について現地で学びました

木曽川起地区で、イタセンバラ飼育に取り組む起小学校4年生の皆さんによる環境学習が実施されました。木曽川上流河川事務所が行っている、同地区でのワンド環境改善工事後のモニタリング調査で採捕された水生生物を観察したり、水質調査を体験したり、みんな、楽しんで勉強していました。

はじめに久保さん（一宮市尾西歴史民俗資料館）から、木曽川と人とのつながりやその変化について教えていただきました。起地区にはかつて砂浜が広がっていて、昭和の初めごろまで市民の水浴場になっていたとのこと。昔あった渡し船も大きな橋が架けられてから使われなくなるなど、いろいろ便利になった近年、人と川との関わりは薄くなってしまったようです。

生きものの観察では、ゼゼラやトウカイヨシノボリ、ブルーギルなどの魚類やトンガリササノハガイ（二枚貝の1種）など起地区で採捕されたおよそ15種類を確認し、水質調査体験では川のみずはきれい(COD: 5mg/L以下)であることなどを学びました。

子ども達は「木曽川には思った以上に魚が多いんだとわかりました」、「木曽川には在来種がいっぱいいたけど、すこし外来種もいることがわかった」、「木曽川のことがもっと学びたくなった」などの感想を聞かせてくれました。

今日の体験が、河川への関心や、生きものを守ろうという気持ちにつながるとうれしいです。



起地区で実施された環境改善工事について説明



小学校から木曽川までは徒歩およそ10分。約100名の児童が現地に訪れました

■2018年12月15日(土)〔世界淡水魚園水族館 アクア・トト ぎふ〕

イタセンバラ情報がぎゅっと詰まった「第9回 イタセンバラ勉強会」 今年もたくさんの参加者で賑わいました

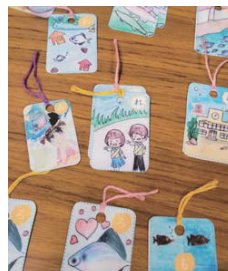
木曽川水系にすむ国指定天然記念物イタセンバラを知ってもらうこと、理解を深めてもらうことを目的として、年1回開催されている「イタセンバラ勉強会」が今年も催されました（主催は木曽川水系イタセンバラ保護協議会）。

第9回目とあって内容はちょっとマニアックで、北村先生（三重県総合博物館）のタナゴ類に関するおはなしでは、産卵の瞬間や野生の個体群が群れて泳いでいるようすなど、貴重な動画をたくさん見せていただきました。岐阜県水産研究所や世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふでの飼育の工夫点（イタセンバラが産卵しやすいような二枚貝の置き方等）なども紹介していただきました。ここでも、二枚貝の飼育の難しさが語られていました（右コラムも参照ください）。

また、羽島市生涯学習課さんなど、地域の皆さんによる保護活動の事例も紹介されました。木曽川高校総合実務部の皆さんによる啓発活動のひとつ「イタセンバラかるた」は、ゲームフィケーションによる子ども達へのアプローチの方法等が評価され、「日本自然保護大賞 2019」にて選考委員特別賞を受賞されたとのこと。当日は、かるたをミニチュアにした菜（下写真）を配っていただきました。生徒の皆さんが描いた絵がとってもかわいらしいです。



会場はおおよそ50名の参加者の皆さんでほぼ満員



イタセンバラかるたのミニチュア菜



生体展示もあって、まさにイタセンバラずくしの2時間

■2019年2月16日(土)〔愛知県 刈谷市産業振興センター〕

愛知県内9地域の生態系ネットワーク協議会関係者が集まる 「あいち生態系ネットワーク協議会地区間交流会」が今年も開催されました

愛知県では、多様な活動主体が共通目標に向けて参加・協働する場として、県内9地域で生態系ネットワーク協議会を設置し、それぞれ地域特性を踏まえ、独自性のある取り組みを展開されています。各地区の協議会や団体間の交流・つながりの強化、生物多様性の保全活動のさらなる活性化を目的として、第2回目となる「あいち生態系ネットワーク協議会地区間交流会」が開催されました。

交流会では、希少種・外来種対策、ビオトープ、生態系保全策の3つのテーマで4つのグループに分かれ、活動で大切にしていることや、困っていることなどに関する意見交換が行われました。

課題のひとつとして、組織の高齢化の問題が挙がりましたが、取り組みに積極的に参加している大学生グループもあり、卒業後の継続も含め、今後の担い手として大学生の活躍が期待されること、次代の取り組みを担う子供たちへの環境教育の必要性が指摘されるなど、活発な意見交換の場となっていました。

また、外来種については、地域別につくられた対策マニュアルを共有し、効率のよい取り組みに繋げるというアイデアが挙がっていました。これについては、武田先生（名古屋大学名誉教授）からの総括コメントにおいて、木曽三川流域の取り組みとも情報共有するなどの連携を図るとい、といったアドバイスもいただきました。

その他、工場ビオトープなど民間企業による取り組みの話題では、取り組みを顕彰するアイデアが挙がるなど、さまざまな立場の地域関係者が連携・協力されているようすを学ぶことができました。



愛知県内各地から、多くの関係者が集まって活発に意見を交わされていました

●木曽三川流域お魚コラム vol.3 「魚類と共生する二枚貝 ドブガイ類に関するあれこれ」

ドブガイと言えば、黒くて石ころのような地味な見た目で、川で見つけるのも大変です。タナゴ好きの方には、卵のベッドとして見逃せないかもしれませんが、二枚貝そのもののファンは多くはないでしょう。

それはなぜかと考えると、見た目もさることながら、とても飼いがらひとが一因のように思えます。ドブガイのなかまは、常にまわりの水を吸い込んで栄養になるものを濾しとって食べるため、エサのやり方が難しく、うまく世話しないと1〜2か月で死んでしまうこともしばしばです。砂利と土を敷いた水そうにタモ口などといったに入れて、屋外で飼えば、比較的長く生きますが、見て楽しいとは言えないものがあります。小さい貝が出てきてうれしくなることもあります。途中経過がわからず、達成感はいまひとつです。ちなみに味の方は、年配の方に聞いたお話では「おおむねドブの味」「食糧難でもあまり食べたくなかった」とのこと。残念です。

そんなドブガイですが、私たちの暮らしと意外な関わりがあり、知らずにドブガイ類（の一部）を身に付けている人とお会いすることがあります。じつは、ドブガイ類の殻は、宝飾品の真珠の核として使われているのです（人工素材が使われる場合もあります）。

核に使われるのは、真っ黒な殻をバカッと開いた内側の、意外ときれいな白い層です。「真珠」といえば真珠貝からぼろって出てくるのでは」と思うかもしれませんが、宝飾品の真珠のほとんどは、丸く削った核を真珠貝へ埋め込み、1〜2年ほどかけてキラキラの層（真珠層）をまわらせてつくり出します。出来上がりの真珠層の厚みは全体の2割以下といったところで、身に着けたパールネックレスの重みの8割ほどはドブガイ類のものといえそうです。

川の濁りをろ過してきれいにしたり、美しいタナゴを育んだり、輝く真珠の核になったりと、自身は地味だけど、いろんな魅力を生み出している健気なドブガイなのです。



ドブガイ類